

コラージュを組み合わせた人生グラフテスト作品に 反映される心理的特性 —人生グラフの分析—

東 知幸*

本論文の目的はコラージュを組み合わせた人生グラフテスト (Life Graph Test with Collages; LGT+C) 作品の人生グラフ部分に反映される心理的特性を調査することであった。調査協力者は病院の新人研修会に参加した看護師・助産師 61 名 (女性 47 名, 男性 14 名, 年齢 20~33 歳) であった。研修会では LGT+C と心理尺度—Purpose-in-Life test (PIL), 多次元自我同一性尺度 (Multi-dimensional Ego Identity Scale; MEIS), 達成動機測定尺度, 一時的気分尺度 (Temporary Mood Scale; TMS) —が実施された。LGT+C の人生グラフの 6 尺度—現高, 過去面積, 未来面積, 過去事数, 未来事数, 全体事数—と各心理尺度の相関分析を行った結果, TMS 得点と現高得点に強い負の相関, MEIS 得点と未来面積得点に中等度の正の相関, PIL 得点と過去面積得点に中等度の正の相関がみられた。以上のことから, 気分の良い者ほどグラフ上の現在の位置を高く表現し, 自我同一性の確立が進んだ者ほど未来のグラフを高く描き, 生きがい感の強い者ほど過去のグラフを高く描くということが示唆された。

Key words : 人生グラフテスト, コラージュ, 気分, 自我同一性, 生きがい感

問題

コラージュを組み合わせた人生グラフテスト (Life Graph Test with Collages; LGT+C) とは東 (2011b) によって開発された心理的援助技法である。別名「人生グラフ with コラージュ」(東, 2018; 2019) と呼ばれている。LGT+C は東 (2010a, 2010b, 2011a) の開発した人生グラフテスト (Life Graph Test; LGT) に, 雑誌等から切り抜いた写真を貼り付けるコラージュ技法を組み合わせた課題を用いたもので, 主に構成的グループ・エンカウンター (Structured-Group Encounter; SGE) (國分, 1981) の枠組みのなかで活用されている。SGE は心理的に概ね健康な人々を対象として, 心理的成長を目的に行われるものである。LGT+C もこれまで主に, 中学生 (東, 2018),

高校生, 大学生, 病院の新人看護職員 (東, 2011b; 2013; 2015; 2016; 2017; 2019), 学校の教職員 (東, 2019) など心理的に大きな問題を抱えていない人々の集団を対象に実施されてきた。なお, LGT は受検者に過去から現在までの人生グラフを描くことを求めるものであったが, LGT+C では参加者に過去から現在に加えて未来の人生グラフも描くことを求めている。したがって, 若い参加者ほど未来を想像する割合が高まり, 高齢になるほど過去をふりかえる割合が高まるという特徴がある。東 (2019) は参加者の年齢が若いほどキャリア教育的効果が, 高齢になるほど回想法的效果が期待できると述べている。

LGT+C の心理的效果に関する研究

LGT+C に関する研究として, これまで主に心

* 人間学部心理学科

理的効果についての研究が行われてきた（東，2013；2015；2017）。調査協力者は病院の新人看護職員であり，LGT+C を用いた SGE の前後に何らかの心理尺度を実施してその変化を分析するという研究デザインが用いられた。心理尺度として，Profile of Mood Status (POMS) (McNair et al., 1992)，Purpose-in-Life test (PIL) (Crumbaugh & Maholick, 1964)，多次元自我同一性尺度 (Multi-dimensional Ego Identity Scale; MEIS) (谷，2001)，達成動機測定尺度 (堀野・森，1991) が使用されている。

POMS は「不安・緊張」「抑うつ」「怒り一敵意」「疲労」「活気」「混乱」といった 6 つの気分状態を測定する心理尺度である。日本語版は横山・荒記 (1994) によって作成された。原版の質問項目は 65 項目であるが，調査には横山 (2005) によって作成された短縮版が使用された。調査の性質上，「過去 1 週間」に経験したさまざまな気分の頻度について回答するという指示は不適切であるため，指示を「過去 90 分間」に変更して使用した。LGT+C を活用した SGE の前後で，一部指示文を変更した POMS を実施したところ，全ての尺度で有意な改善がみられた。したがって，LGT+C を活用した SGE は参加者の不安・緊張，抑うつ，怒り・敵意，疲労，混乱を和らげ，参加者を活気づける効果があることが示唆された。

PIL は Frankl (1969/1979) の概念をもとに開発された心理尺度である。彼は，人生の意味・目的を見失うと空虚感 (実存的空虚) に苛まれ，さまざまな心理的問題が生じると考え，人生の意味・目的を見出すことを援助するロゴセラピーという心理療法を提唱した。PIL の日本版 (PIL 研究会，1993) は 20 項目の質問に対して 7 件法で回答する Part A，文章完成法形式の Part B，自由回答形式の Part C の三部構成であるが，調査には Part A が使用された。LGT+C を活用した SGE の前後で PIL を実施したところ，PIL 得点に有意な上昇がみられたので，LGT+C を活用した SGE は参加者の生きがい感を向上させることが示唆された。

MEIS は青年期の発達主題である自我同一性 (Erikson, 1963/1977) の確立の程度を測定するた

めに開発された心理尺度である。自我同一性について，宮下 (2014) は人間が社会 (対人関係) への適応のために行う機能の総体であると説明している。鍾 (1990) は自我同一性とは「自分とは何者か」「自分は何になりたいのか」などの自己意識であり，その確立が不十分であると「自我同一性拡散」という危機的状态に陥り，不登校や対人恐怖症などさまざまな心理的問題が生じると述べている。MEIS の質問項目は 20 項目であり，7 件法での回答形式である。LGT+C を活用した SGE の前後で MEIS を実施したところ，MEIS 得点に有意な上昇がみられたので，LGT+C を活用した SGE は参加者の自我同一性の確立を促進させることが示唆された。

達成動機測定尺度は，いわゆる「やる気」(宮本，1981) を意味する達成動機の強さを測定するために開発されたものである。他者を凌ぎ他者に勝つことで社会的評価を得ることを目指す動機である競争的達成動機尺度 (Competitive Achievement Motive scale; CAM) と，他者・社会の評価にはとらわれず自分なりの達成基準への到達を目指す動機である自己充實的達成動機尺度 (Self-fulfilment Achievement Motive scale; SFAM) で構成されている。質問項目は全 23 項目であり，回答形式は 7 件法である。LGT+C を活用した SGE の前後で達成動機測定尺度を実施したところ，CAM 得点に有意な変化はみられなかったが，SFAM 得点に有意な上昇がみられた。したがって，LGT+C を活用した SGE は参加者の競争的達成動機には影響を与えずに，自己充實的達成動機を向上させることが示唆された。

以上のように新人看護職員を対象とした調査から，LGT+C を活用した SGE は参加者の気分を改善させ，生きがい感を強め，自我同一性の確立を促進し，自分なりの達成基準への到達を目指す動機づけを向上させるなどさまざまな心理的效果をもたらすことが示唆されている。また，中学生を対象とした質的調査 (東，2018) でも類似した心理的效果の存在が示唆されている。

LGT+C 作品に関する研究

心理的效果についての研究以外に，LGT+C 作

品に焦点を当てた研究もある。東（2016）は病院の新人看護職員 81 名（女性 65 名，男性 16 名）が作成した LGT+C 作品について人生グラフ，ライフイベント，コラージュの 3 要素に分けて数量化を行い，主に男女差について検討を行った。人生グラフについては「現高」「過去面積」「未来面積」「過去事数」「未来事数」「全体事数」の 6 尺度について数量化を行った。現高得点は現状認識がどの程度肯定的かという側面を表している。過去面積得点は過去を肯定的にとらえているか，未来面積得点は未来を肯定的にとらえているかということを表している。過去事数得点は過去に関するライフイベントの記述の多さ，未来事数得点は未来に関するライフイベントの記述の多さ，全体事数得点は過去と未来のライフイベントの記述の多さに関する尺度である。これら 6 尺度の男女差を分析したところ，いずれの尺度においても有意差はみられなかった。そして，ライフイベントは記述内容をもとに「誕生」「学業」「職業」「余暇」「親密」「子孫」「生活」「老い」「病」「死」の 10 種に分類された。それぞれの分類の出現の有無と性別の関連を分析したところ，いずれの分類においても有意な関連はみられなかった。最後に，コラージュは「切り方」4 種，「貼り方」4 種，「内容」15 種に分類された。それぞれの分類の出現の有無と性別の関連を分析したところ，内容の一分類である「戦い」のみ男性が女性と比べて出現頻度が有意に多いということが示唆された。以上のように，コラージュ表現の一部に男女差が見られたものの，全体として見ると LGT+C の表現にあまり男女差がないことが示唆されている。

LGT+C 作品は非常に豊富な情報を含んでいるが，これまで男女差が調査されたのみであり，さらなる研究が望まれる。例えば，LGT における現高得点と精神的健康度に中等度の相関があったように（東，2010a；2011a），LGT+C における人生グラフの高低も何らかの心理的特性と関連があるかもしれない。

目的

本論文の目的は，LGT+C 作品における人生グラフ表現と心理的特性の関連を調査することで

あった。心理的特性として気分，生きがい感，自我同一性，達成動機を取り上げ，次に挙げる①～④を仮説として調査を行った。

- ①気分の良い者ほど現在の状態を表す現高得点が高得点になる。
- ②生きがい感の強い者ほどこれまでの人生に意味を見出していると考えられるので過去面積得点が高得点になる。さらに人生に目的を持っていると考えられるので未来面積得点が高得点になる。
- ③自我同一性の確立が進んでいる者ほど心理的に安定していると考えられるので現高得点が高得点になる。
- ④達成動機の強い者ほど成功した未来を想像すると考えられるので未来面積得点が高得点になる。

LGT+C は心理的援助技法であり心理アセスメントの道具ではないが，もし，人生グラフ表現と心理的特性に何らかの関連があることが明らかになれば，援助者が LGT+C 作品を通して被援助者である制作者の心理的特徴をアセスメントするのに役立つであろう。さらに，制作者同士で LGT+C 作品のシェアリングをする際に，援助者から LGT+C 表現と心理的特徴の関連について知らされたならば，被援助者自身も自ら制作した LGT+C 作品を手がかりにして一層自己理解を深めることができるようになるであろう。

方法

調査協力者

毎年 5 月に「心のリフレッシュ」を目的として開催されている 2 つの病院の新人看護師・助産師を対象とした研修会に参加した 62 名のうち 61 名（2013 年 18 名，2014 年 21 名，2015 年 22 名）を調査協力者とした。61 名のうち 47 名が女性，14 名が男性であり，年齢幅は 20～33 歳，平均年齢は 22.21 歳（ $SD=2.68$ ）であった。

倫理的配慮

研修会の実施責任者から調査実施の許可を得た

上で、研修会当日参加者に対して調査の趣旨と、調査に協力しない場合でも不利益になることは一切ないことなどを書面および口頭にて説明し、署名によって同意の得られた者を調査協力者とした。

調査方法

概要 研修会ではLGT+Cを活用したSGEが実施された。スタッフは臨床心理士である筆者1名であった。場所は病院内の会議室で行われ、時間は90分間であった。

用具 筆記用具、はさみ、のりは参加者に持参してもらった。そして、色ペン、円形シール（直径1.5cm）、コラージュ用の雑誌（さまざまなジャンルのものを1グループ20冊ほど）、LGT+C用紙（図1）は筆者が準備した。

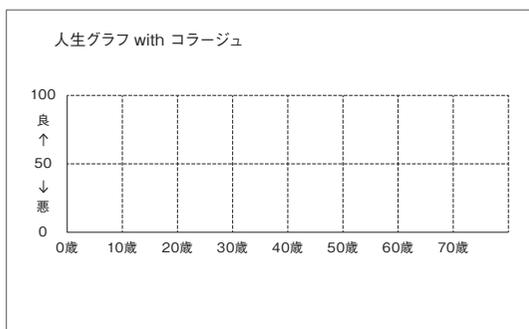


図1 LGT+C用紙

LGT+C用紙 先行研究（東, 2011b; 2013; 2015; 2016; 2017; 2018）と同じLGT+C用紙を使用した。用紙の大きさはA3サイズである。人生グラフ記入欄はX軸が年齢軸であり、10歳刻

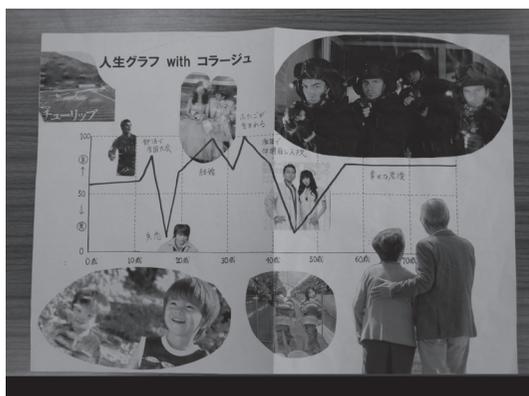


図2 LGT+C用紙裏面の記載例

みで70歳まで印字されている。実際には80歳に相当するところまで目盛りがあるが、80歳以降の人生についても表現できるように、あえて80歳とは記されていない。なお、10歳ごとの幅は40mmに設定されている。そして、Y軸は評価軸である。Y軸の高さは100mmに設定されており、高い位置にグラフを描くほど良い時期であることを表している。人生グラフ記入欄の上下はコラージュがしやすいように余白を多めに取っている。また、LGT+C用紙の裏面（図2）には制作例（白黒印刷）が記載されている。

心理尺度 2013年の調査はPIL(Crumbaugh & Maholick, 1964; PIL研究会, 1993), 2014年はMEIS(谷, 2001), 2015年は達成動機測定尺度(堀野・森, 1991)と一時的気分尺度(Temporary Mood Scale; TMS)(徳田, 2011)が使用された。なお、TMSはPOMSと類似した6つの尺度「緊張」「抑鬱」「怒り」「活気」「疲労」「混乱」をもっている。質問項目は全18項目であり、POMSよりも短時間で回答ができる。また、過去の一定期間ではなく、「今現在の気分」について回答を求めているのがPOMSとの違いであり、POMSを使用した先行研究(東, 2013)のように教示を変更する必要がないという利点があるため、気分状態を測定する心理尺度としてTMSを採用した。回答形式は「非常にあてはまる」(5点)から「まったくあてはまらない」(1点)までの5件法である。各尺度にはそれぞれ3つの質問項目があるので、各尺度の得点範囲は3~15点となり、高得点であるほど尺度名で表された気分が強いことを表している。また、POMSにおけるTotal Mood Disturbance (TMD) 得点、すなわち「緊張」+「抑鬱」+「怒り」+「混乱」+「疲労」-「活気」の得点をTMS得点とした。TMS得点は高得点であるほど気分状態が悪いことを表している。

SGEの流れ

イントロダクション 筆者がSGEの趣旨を説明した後、調査の趣旨について説明し、同意が得られた者には心理尺度に回答してもらった。そして、参加者をくじびきで6名程の小グループに分けて、それぞれのグループで簡単な自己紹介をし

でもらった。

エクササイズ 筆者が「過去・現在・未来にわたる人生グラフと浮き沈みに関する出来事を書いてもらった上で、人生に関連する写真や気に入った写真などを雑誌から自由に切り抜いて貼り付けてください。そして人生グラフ上の現在の位置には円形シールを貼ってください。書きたくないことを無理に書く必要はありません」などと教示をしてLGT+Cを制作するエクササイズを開始した。要した時間は45~50分であった。

シェアリング 筆者が「発表者が傷つくような発言は決してしないように」という約束事を参加者に伝えた上で、各グループで一人ずつ順番に2分程度で作品の発表をしてもらい、発表後は他のメンバーが感想を述べたり、質問をするなどしてシェアリングを行った。

最後に、筆者が研修会のまとめを簡潔に述べた後、再び心理尺度を実施し、感想文の記述を依頼した。ただし、この2回目の心理尺度と感想文の分析は先行研究(東, 2015; 2017)ですで行っているため本研究では分析対象としない。

分析方法

LGT+Cの人生グラフ部分について東(2016)による数量化方法(表1, 図3, 図4)を用いて現高得点, 過去面積得点, 未来面積得点, 過去事数得点, 未来事数得点, 全体事数得点を算出した。

SGEのイントロダクションで実施された心理尺度について、PILの総合得点をPIL得点、MEISの総合得点をMEIS得点、達成動機測定尺度における自己充實的達成動機尺度の総合得点を

SFAM得点、競争的達成動機尺度の総合得点をCAM得点とした。そして、TMSはTMS得点と6つの下位尺度得点を分析に使用した。

人生グラフの6尺度についてPIL得点、MEIS得点、SFAM得点、CAM得点、TMS得点および6つの下位尺度とのPearson相関分析(両側検定)を行った。有意水準は5%とした。

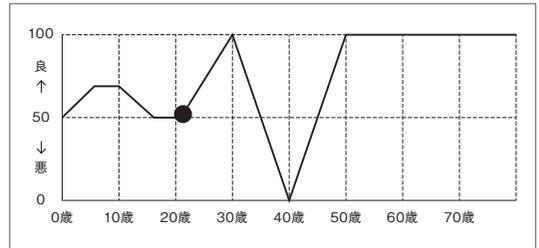


図3 LGT+C 模擬事例 (※コラージュは省略)

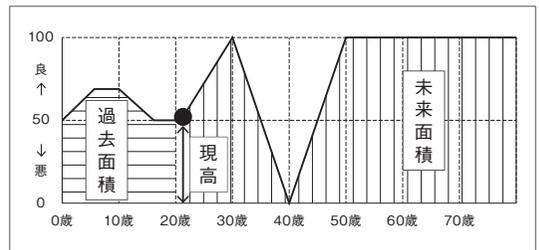


図4 LGT+C 模擬事例の数量化指標

結果

LGT+Cの人生グラフの各尺度得点および各心理尺度との相関分析結果を表2に示した。人生グラフの各尺度のうち、現高得点はM=54.44 (SD=22.61) 点, 過去面積得点はM=66.74

表1 LGT+C 作品の人生グラフ部分の数量化方法。東(2016)をもとに作成。

尺度名	計算方法
現高	人生グラフ上の現在の位置を示す円形シールからX軸に向かって垂線を引いたときの垂線の長さ(mm).
過去面積	$= (\text{過去部分のグラフ面積 cm}^2 \div (\text{グラフ上の年齢} \times 4)) \times 100$ ※例えば図3の場合、過去部分のグラフ面積とは図4の横縞部分を指す
未来面積	$= (\text{未来部分のグラフ面積 cm}^2 \div ((80 - \text{グラフ上の年齢}) \times 4)) \times 100$ ※例えば図3の場合、未来部分のグラフ面積とは図4の縦縞部分を指す
過去事数	過去に関するライフイベントの記述件数 ※1文に複数のライフイベントが記述してあれば複数件として数える
未来事数	未来に関するライフイベントの記述件数 ※1文に複数のライフイベントが記述してあれば複数件として数える
全体事数	= 過去事数 + 未来事数

表2 人生グラフの平均値 (N=61), および人生グラフと各心理尺度間の Pearson 相関分析 (両側検定)

人生グラフ	M(SD)	PIL (n=18)	MEIS (n=21)	SFAM (n=22)	CAM (n=22)	TMS (n=22)
		r	r	r	r	r
現高	54.44(22.61)	0.31	0.11	0.32	0.29	-0.72***
過去面積	66.74(12.43)	0.46†	0.28	0.35	0.17	-0.18
未来面積	73.67(14.27)	0.32	0.46*	0.12	0.19	-0.15
過去事数	2.48(2.08)	0.03	0.20	-0.15	-0.25	-0.07
未来事数	5.23(2.99)	0.08	-0.37	0.37†	0.02	-0.24
全体事数	7.70(4.17)	0.07	-0.27	0.19	-0.12	-0.21

† $p < 0.1$ * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

表3 人生グラフと TMS 下位尺度間の Pearson 相関分析 (両側検定) (n = 22)

人生グラフ	緊張	抑鬱	怒り	活気	疲労	混乱
	r	r	r	r	r	r
現高	-0.62**	-0.49*	-0.55**	0.50*	-0.65**	-0.58**
過去面積	-0.15	-0.27	-0.21	-0.11	-0.01	-0.24
未来面積	-0.15	-0.08	-0.24	-0.14	-0.13	-0.12
過去事数	-0.05	-0.27	-0.01	-0.18	-0.23	-0.14
未来事数	-0.03	-0.28	-0.09	0.11	-0.19	-0.30
全体事数	-0.05	-0.36	-0.06	-0.02	-0.26	-0.29

† $p < 0.1$ * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

(SD=12.43) 点, 未来面積得点はM=73.67 (SD=14.27) 点であった. そして, TMS 得点と現高得点に有意で強い負の相関 ($r=-0.72, p<0.001$) があった. PIL 得点と過去面積得点の相関 ($r=0.46, p<0.1$) は有意でなく, PIL と未来面積得点の相関 ($r=0.32, n.s.$) も有意ではなかった. また, MEIS 得点と現高得点の相関 ($r=0.11, n.s.$) は有意ではなかったが, MEIS 得点と未来面積得点に中等度の有意な正の相関 ($r=0.46, p<0.05$) がみられた.

さらに, 人生グラフの各尺度と TMS の6つの下位尺度の相関分析結果を表3に示した. TMS の全ての尺度が現高得点と有意な相関がみられたが, 過去面積得点, 未来面積得点, 過去事数得点, 未来事数得点, 全体事数得点とはいずれも有意な相関がみられなかった.

考察

人生グラフの尺度得点の考察

過去面積得点はM=66.74(SD=12.43)点であり, 調査協力者は過去の人生について肯定的にとらえている者が多いことが示唆された. 彼女(彼)らは看護師・助産師になるという夢・目標を達成し, 実際に病院に就職した直後であり, これまでの人生を肯定的に意味づけている者が多いと考

えられる. なお, LGT+C の過去面積得点に相当する LGT の面積得点の一般成人の平均値は 63.8 (SD=11.9) 点であり (東, 2011a), 同等の水準であった.

次に, 現高得点はM=54.44(SD=22.61)点であり, 調査協力者は現状について良くもなく, 悪くもないと認識している者が多いことが示唆された. なお, LGT における現高得点の一般成人の平均値は 65.9(SD=22.5) 点であり (東, 2011a), 今回の調査結果はそれより少し低い水準であった. 看護師・助産師として働くという目標を叶えた直後である彼女(彼)らの現高得点が過去面積得点, あるいは東(2011a)の調査と比べて低得点であったのは, まだ入職1ヵ月であり慣れない仕事に疲弊しているためだと考えられる.

そして, 未来面積得点はM=73.67(SD=14.27)点であり, 調査協力者は自分の将来についてかなり肯定的にとらえている者が多いことが示唆された. 過去面積得点や現高得点と比べて高得点となったのは, 現在は慣れない環境で苦勞しているが, やがて仕事に慣れてくれば, 将来は思い描いていた理想的な人生が訪れるであろうという希望にあふれているからだと考えられる. なお, LGT の場合, 未来面積得点に相当する尺度はない.

仮説の検証

仮説①は「気分の良い者ほど現在の状態を表す現高得点が高得点になる」であった。現高得点とTMS得点に有意で強い負の相関がみられたことから、制作時に気分の良い者ほど現高得点が高得点、すなわち人生グラフにおける現在位置をより高く描くということが示唆された。これは仮説①を支持する結果であった。さらに、TMSの下位尺度別に見ると相関係数の絶対値は0.49(抑鬱)から0.65(疲労)の範囲であり大きな差はなかった。以上のことから、疲労、緊張、混乱、怒り、抑鬱気分が少なく(弱くて)、活気に満ちている者ほど人生グラフの現在位置をより高く描くことができる。

仮説②は「生きがい感の強い者ほどこれまでの人生に意味を見出していると考えられるので過去面積得点が高得点になる。さらに人生に目的を持っていると考えられるので未来面積得点が高得点になる」であった。PIL得点と過去面積得点の相関は有意ではなかったが($p < 0.1$)、相関係数が0.46もあることを考えると、生きがい感の強い者ほど過去面積得点が高得点になるという仮説は一応支持されたと判断してよいであろう。さらにPIL得点と未来面積得点の相関は有意ではなく、相関係数も0.32とそれほど大きくないことから、生きがい感の強い者ほど未来面積得点が高得点になるという仮説は支持されなかったといえる。

仮説③は「自我同一性の確立が進んでいる者ほど心理的に安定していると考えられるので現高得点が高得点になる」であった。しかし、MEIS得点と現高得点に有意な相関がみられなかったことから、仮説③を支持する結果は得られなかった。一方、MEIS得点と未来面積得点に中等度の有意な相関($r=0.46$)があった。これは自我同一性の確立が進んでいる者ほど肯定的な将来を思い描くということを示唆している。自我同一性の感覚が育っているほど、自分自身についてよく理解しており、自分の持っている力を十分に社会に役立てることができると考えているので、未来はきっと良いものになるだろうという認識につながっていると考えられる。

仮説④は「達成動機の強い者ほど成功した未来

を想像すると考えられるので未来面積得点が高得点になる」であった。しかしながら、SFAM得点と未来面積得点の相関は有意ではなく、CAM得点と未来面積得点にも有意な相関がみられなかったことから、仮説④を支持する結果は得られなかった。肯定的な未来を思い描くか、あるいは否定的な未来を思い描くかということに制作者のやる気の強弱は関係しないということが示唆された。

総合考察

以上のことから、LGT+Cの人生グラフにおける現高得点は制作者の気分状態を強く反映し、未来面積得点は自我同一性の確立の程度を反映しており、過去面積得点は生きがい感を反映している可能性があると考えられる。したがって、人生グラフ上の現在の位置を極端に低いところに表現する者、例えば現高得点が平均値の $-2SD$ 以下(9.22点以下)の者に対しては、気分の障害など何らかの心理的問題を抱えていないか注意する必要がある。また、未来の人生グラフを著しく低い位置に描く者、例えば未来面積得点が平均値の $-2SD$ 以下(45.13点以下)の者は自我同一性拡散の状態に陥っていないか注意が必要である。そして、過去の人生グラフを著しく低い位置に描く者、例えば過去面積得点が平均値の $-2SD$ 以下(41.88点以下)の者は生きがい感の乏しさ、実存的空虚に苦しんでいないか注意する必要がある。LGT+Cを活用したSGE自体にも気分の改善、自我同一性の確立の促進、生きがい感の向上等の効果が示唆されているが、気分の障害、自我同一性拡散、実存的空虚の問題が疑われる場合には、必要に応じて心理的支援あるいは医療的支援につなげる方法を検討しなければならない。

本研究の限界と今後の課題

本研究における調査協力者は病院の新人看護師・助産師であった。彼女(彼)らは国家資格に合格するという目標を達成し、経済的にも安定した職を得ているという点で、一般の人と比べて未来に対する意味づけ(未来面積得点)が肯定的で

ある可能性がある。したがって、今後の課題として人生グラフの各尺度について一般の人々を対象とした調査が必要である。そして、主な年齢層は20代前半であった。LGT+Cは若年者にとっては主に未来を想像する課題であり高齢者にとっては主に過去を回想する課題であるという特徴があるため、中年期や老年期の人たちの集団でも同じ結果が得られるか改めて調査する必要がある。

また、各心理尺度が実施された調査協力者数が18~22名と少なかったことから、人生グラフ尺度との相関が一定程度あるにも関わらず、有意性を検出できない場合があった。特にPILは調査協力者が18名であり、人生グラフの過去面積得点との相関が0.46あったにも関わらず、有意性を十分に検出することができなかった。今後、適切なサンプル数で再調査を行いたい。

最後に、今回は分析対象としなかったLGT+C作品の人生グラフ以外の要素、すなわち、ライフイベントの記述内容やコラージュの表現方法についても心理アセスメント、あるいは制作者自身の自己理解に役立てられるように調査を行いたい。

引用文献

- Crumbaugh, J.C. & Maholick, L.T.(1964). An Experimental Study in Existentialism: The Psychometric Approach to Frankl's Concept of Noogenic Neurosis, *Journal of Clinical Psychology*, 20, 200-207.
- Erikson, E.H.(1963). *Childhood and Society: Second Edition*, New York: W.W.Norton & Company, Inc(エリクソン, E.H., 仁科弥生訳(1977). 幼児期と社会 1, みすず書房).
- Frankl, V.E.(1969). *The Will to Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy*, New York: The New American Library, Inc.
- 大沢博訳(1979). 意味への意思——ロゴセラピーの基礎と適用, プレイン出版.
- 東知幸(2010a). 人生グラフテストの開発, *精神科治療学*, 25, 259-266.
- 東知幸(2010b). 人生グラフテストとライフイベント, *最新精神医学*, 15, 177-184.
- 東知幸(2011a). 人生グラフテストの基礎研究, 平

- 成 22 年度京都文教大学大学院臨床心理学研究科博士論文.
- 東知幸(2011b). コラージュを組み合わせた人生グラフテスト——予備研究, *日本コラージュ療法学会第3回大会プログラム・抄録集*, 12-13.
- 東知幸(2013). コラージュを組み合わせた人生グラフテストを用いたグループワークがもたらす心理的效果, *心理臨床学研究*, 31, 541-551.
- 東知幸(2015). コラージュを組み合わせた人生グラフテストを活用した構成的グループ・エンカウンター——生きがい感と自我同一性に与える効果, *心理臨床学研究*, 33, 4-14.
- 東知幸(2016). コラージュを組み合わせた人生グラフテスト作品の数量化分析, *コラージュ療法学研究*, 7, 29-40.
- 東知幸(2017). コラージュを組み合わせた人生グラフテストを用いた構成的グループ・エンカウンターは達成動機を高めるか?, *コラージュ療法学研究*, 8, 27-32.
- 東知幸(2018). 中学生に対する「人生グラフ with コラージュ」の心理的效果, *コラージュ療法学研究*, 9, 3-13.
- 東知幸(2019). 働く人に対する「人生グラフ with コラージュ」を用いた心理的援助, *コラージュ療法学研究*, 9, 29-32.
- 堀野緑・森和代(1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因, *教育心理学研究*, 39, 308-315.
- 國分康孝(1981). エンカウンター——心とこころのふれあい, 誠信書房.
- McNair, D.M., Lorr, M., & Droppleman, L.F.(1992). *Profile of Mood States*, San Diego: Educational and Industrial Testing Service.
- 宮本美沙子(1981). やる気の心理学, 創元社.
- 宮下一博(2014). アイデンティティ研究の必要性, 宮下一博・谷冬彦・大倉得史編, *アイデンティティ研究ハンドブック*, ナカニシヤ出版, 1-10.
- PIL研究会編(1993). *生きがい——PILテストつき*, (株)システムパブリカ.
- 谷冬彦(2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成, *教育心理学研究*, 49, 265-273.
- 鑑幹八郎(1990). *アイデンティティの心理学*, 講

談社.

徳田完二 (2011). 一時的気分尺度 (TMS) の妥当性.
立命館人間科学研究, 22, 1-6.

横山和仁・荒記俊一 (1994). 日本語版 POMS 手引
き, 金子書房.

横山和仁 (2005). POMS 短縮版手引きと事例解説,
金子書房.

(2019.9.24 受稿, 2019.10.9 受理)